

乳児保育の在り方を探る

～保育現場のエピソード～

古川 和子

Pursuit of the Infant Care's Course
The Episodes at the Nursery Field

Kazuko FURUKAWA

キーワード：乳児保育

はじめに

現在、待機児童の問題が連日ニュースで流れるほど、社会問題になっており、待機児童の現状を年齢別で見ても、0歳児から2歳児の低年齢層が全体の8割を占めている。待機児童の解消のために、各自治体や政府が様々な取り組みを行っている現状がある。そして、量だけでなく『質』の確保も欠かせない条件である。私も現在C市の取り組みの1つである小規模保育所と家庭的保育への巡回指導員として施設を訪問している。小規模保育所や家庭的保育の方々には、乳児保育の基礎となる愛着関係の絆を『一人一人の発達と照らし合わせ、子どもの育ちをどう保証するのか』を、一緒に考えていくことで保育の質の向上に繋がるのではないかと実践中である。

又、本校の学生には乳児保育の授業を担当し、40年の経験、研修の中で得られたエピソード等を通して出来るだけ具体的に話しをしている。その中で、それぞれのエピソードは、何故起こり、それをどう改善に向けて仮説立てをした上で実践し、その結果がどうであっ

たか。そして、その結果について、反省・評価を行い、それぞれの事象に対する考察を行ってきた。もちろん良い結果もあれば良くない結果もある訳である。そして、良い結果でなければ、再度 仮説立てに立ち返る訳である。それを、現場においても活用してきた。例えば、行事に取り組む前、去年までやっていたからとか、先輩が言ったから等、何も考えずただ漫然とやることは、保育者自身がワクワク・ドキドキしないというのはどうなのか。物事に取り組む前には、何故その保育を行う必要があるのか。どうすることでそれらの課題を改善していけるのか？といった、『0から考えること』が必要であると感じている。保育は、ありとあらゆるテーマが連続して出現する。とにかく、実践を行う者として、殆どの場合どんな活動をしようか考えがちである。これでは、いきなり方法論を考えるということになる。厳しく言えば、テーマの求める課題、ねらいを飛ばして、ただ子どもと何かをするというのでは、プロとして、また子どもを預ける保護者側として実に頼りないものと

感じるであろう。プロの保育士として、子ども達と関わる以上、『何を育てたいのか』といったテーマに対する課題やねらいをきちんと押さえたうえで、実践していくのでなければならない訳である。そして、資料1に上げた『何故の方式』、これに基づきつつ、テーマ以下を順序立てて考えることは、実践すべき事柄についても割り出しやすいと考えている。つまり、自動的とまでは言わないものの、プロの保育士としての成すべきことを考え出す大いなる助けとなると感じている。指導者の立場として、このように公式化することで、学生達各々が何故敬愛短大を選び、入学して勉強し、将来どのような保育者になりたいか、なるべきかを自問自答して頂くための一助となれば幸いである。

私は、小さい時から保育士に憧れ、その通り保育の学校に通い、保育所に勤務することが出来た。当初は単に子どもが好きで、子どもとの関わりを楽しみながら保育を行っていた。しかし、様々な研修や障害児保育の実践から3H(Heart・Hand・Head)を備えることが、必要であると強く認識するようになった。筆頭であるHeart(愛情)については、学習や経験が少なくとも子どもが好きという要素ではほぼ満たしているとも考えられる。要は経験が無くとも資格が無くとも持っているという要素である。極端に言えば、若い学生もベテランもそれほど差のない要素ともいえる。しかし、そのHeartの要素を持たない者が保育者となってはいけない、最重要要素と考える。その大切なHeartを子ども達の保育においてしっ

かりと伝えていくためには、Hand(保育技術)とHead(知識・理論)がプロの保育士として必要な要素である。つまり、Heartを持った学生達には、HandとHeadを兼ね備えた保育士となって貰いたい。

逆を言えば、どんなに保育理論を学んで、理論武装が出来ていたとしても、Heartがなければそれは、子ども達の心に響かない空虚なものであるし、時に子ども達の心を傷つける可能性すらある。この3Hを土台とした上で、後述する何故の様式(資料1)を活用していくことで、網羅することに繋がるであろうと考える。

資料1

テーマ(課題)

課題(何故そのテーマは必要なのか。必要と判断したのであればテーマに基づいた課題を設定する。)	
仮説(課題を達成する為に何をどうしたら良いのか仮説立てを行う。)	
実践(立てた仮説に基づいて実践する。)	
結果(実践を行って、課題に対してどのような結果がでたのか。)	
反省・評価(結果を受け、関わり方が、適切であったか否か。問題点を明らかにして改善していくこと)	
考察(良い結果が得られたのは何故。又、達成できなかったのは何故。その場合は再度仮説立てを行う。)	

それでは、この様式に則りエピソードを通して、振り返ってみたい。

課題（テーマ）

『乳児保育の在り方を探る。』

～保育現場のエピソード～

保育を取り巻く環境は今、様々な問題が生じている。待機児童の問題については、現場としては、少々手に負えない問題であるので、今回は現場サイドからのエピソードから数例あげてみた。

エピソード1

1歳児の児童が、庭で遊んでいるが、片づけて入室の時間となるがまだ遊んでいた。

エピソード2

1歳児クラス全体で散歩を計画したが、行きたがらない。

エピソード3

2歳児の児童が食事に対して好き嫌いがあ

エピソード4

2歳児の児童が午睡の際、なかなか布団に入らない。

エピソード5

小規模保育所の巡回中、昼食の配膳時に子どもがいらないのに気付く。

仮説

エピソード1について

仮説立て

何故、入りたくないのかをまず考えてみる。

遊びが満足していないのか。

楽しく遊んでいるのに、中断したくない。

等が考えられる。

管理的に考えると、一斉に集団行動をとらせたいところでは有るが、まずは、子どもの気持ちを重視し、満足できるまで遊ばせてみてはどうだろうか。その際、自分のクラスだけで保育が出来ないのであれば、他クラスの職員等と連携を図れると良いのであろう。

エピソード2について

仮説立て

何故散歩に行きたがらないのかをまず考えてみる。

集団での散歩が楽しくないのではないのか。

又は、今の遊びをもっと楽しんでいたのか。

更には、言葉では伝えられないが、体調がすぐれない等が考えられる。

散歩に行きたがらない子に対しては、無理に連れ出すことはせず、子ども自身の気持ちを優先してあげると良いのではないのか。その際、他クラスの職員と連携を図る。更にいえば、保育所全体の認識として、担当のクラスだけ見るのではなく、全職員で連携して保育を行うという普段からの共通理解が、更には『あ・うんの呼吸』まで得られれば理想的であろう。

エピソード3について

仮説立て

何故食べようとしなくていいのかを考えてみる。

体調が悪い。朝食が遅くお腹が空いていない。

好きなメニューでない等が考えられる。

保育者が食べる真似をして「おいしいよ。」と、進めてみると良いのではないかと。ただし、1口だけでも無理強いをしない方がよいであろう。

エピソード4について

仮説立て

何故、午睡しつづけないのかを考えてみる。

夜更かしして朝寝坊したのでまだ寝たくないのではないかと。また、今の遊びなどが楽しくてお布団に入りたくない場合などが考えられる。

無理に布団で横にならせようとはせず、今の遊びをしばらく継続させておいてあげるのが良いのではないかと。その際、騒がないように「静かに遊んでね。」と、知らせることで少しずつ自覚していけるのではないかと。

エピソード5について

仮説立て

何故、子どもの「置き去り」に気づけなかったのか。「〇〇人残っています。」と、まず口頭で伝達する。又、子どもの人数把握をする為の方法がはっきりしていなかったため、それを提案し、表を作成すると改善できるのではないかと。

実践

エピソード1について

実践

会議や研修会において、仮説立てられたことについて共通理解を図り、実践に取り組んだ。

結果

子どもは十分に遊べたこと、また、クラスメイトがもういないことに気づき、自分も入らなければならない様子で、担任の声掛けに今度は応じていた。又、別のケースにおいては、担任が付き添えない場合は、他クラスのまだ遊んでいる職員にお願いするという連携ができた。

反省・評価

結果を受け、この仮説立てと取り組みは概ね良かった。

考察

この年齢の子どもの気持ちを汲み取り、十分に満足させることが大切であろう。同時に社会性の芽生えが見られることで、少しずつ一緒に行動が取れていけるであろう。

エピソード2について

実践

会議や研修会において、仮説立てられたことについて共通理解を図り、実践に取り組んだ。

朝の保護者からの引継ぎやおたより帳からは体調に変り無く、散歩も可能と伺っている。

乳児保育の在り方を探る

たが、実際には行きたがらない子どもの様子から、体調が優れないのではないかと、検温すると微熱が有った。

結果

微熱が有り、体調がすぐれなかった為、行きたがらなかったことが解かった。

反省・評価

母親も多忙の中、子どもの体調を把握しきれない場合も有る。又、途中から体調が悪くなる場合も有るので、視診や触診から検温したのが良かった。

考察

子どもの気持ちや体調など、特に未満児は、小さな変化が起こりうるので、細やかな観察が必要なことが解かる。

エピソード3について

実践

会議や研修会において、仮説だてられたことについて共通理解を図り、実践に取り組んだ。

結果

進めてはみたが嫌いな物は、口にもしなかった。ただ、他のメニューについては、食べていた。

反省・評価

嫌いなものを口にしなかったのは、残念ではあるが、午前中の遊び方についてお腹が空いて、食べたくなるような活動への取り組み

を工夫する。(動的な運動量のあるものだけに限らず、知的、精神的活動からも集中することで活動量は得られる。)

考察

食事は、近年『食育』とも言われるように、子どもの精神面や時にトラウマとなる場合も考えられるので、絶対無理強いは避けるべきであろう。ただ、嫌いなものも少しずつは食べられるようになって貰いたいので、午前中の遊びの工夫、そして、家庭での生活リズムの協力も必要であろう。

エピソード4について

実践

会議や研修会において、仮説立てられたことについて共通理解を図り、実践に取り組んだ。

今回のケースの場合、夜更かしして朝起きるのが遅かったのが、おたより帳から伺えた。

結果

騒がずに、静かに遊んでいた。

反省・評価

静かに遊べたことで、今、本来何をする時間で有るのが理解できているなど、社会性が育っているのが伺える。

考察

勿論、平均的、理想的生活リズムと言うのはあるが、それぞれの家庭において、事情もあり、早く寝る事の必要性は知らせているが、やむを得ない事も理解してあげる必要がある。

又、『その時間、静かに遊べる。』といった、社会性に繋げていってみるのも、職員の意識としてもちたいところである。

エピソード5について 実践

表の作成が行われ、散歩時などにチェックがなされた。

結果

提案した表の作成がされ、活用していた。その後は、「置き去り」という報告はない。

反省・評価

チェック表があることで、置き去りと言う事態が避けられることが実証できた。

考察

チェック表も含め、様々な方策が考えられると思うが、形骸化させること無く続けていくことが必要であろう。また、市との連携をすることで、資質の向上に繋がると考えられる。

エピソードのまとめ

現場でよくあったエピソードを5つあげてみたが、あらゆるエピソードにおいて、まず、子どもの気持ちや状態を理解し、保育する時は保育者主導に陥らないように意識を持ち続けて欲しい。何故の様式は、それを考えていく上での一助となると確信し、私は、現場において例えば、恒例化された運動会や発表会（表現遊び）など行う場合でも、まず『0からスタートする』ように実践指導してきた。何

故運動会を行うのか？あえて、行う必要は無いのではないかと、逆説的に問うたり、刺激を与えてきた。当初、そのような問いに戸惑いも見られたが、何故の様式を表示し、順番に1つずつ、考えていく中で理解され活用できるようになってきた。将来活躍して貰わなければならない若い方々や学生達においても、少しずつでも理解して頂き、方法論的に取り敢えず今何をやろうかと考えるのは、避けて欲しいものである。

では、自身の授業の課題として、保育者の資質について、将来子ども達に携わる学生達は、どのように認識しているのであろうか。

そこで、『乳児と向き合う時、自分の大切にしたいもの』について1年生全員に小論文形式で記述をし、アンケートをとった。それをクラスごとにまとめた。

授業の中では、自分のクラスのまとめられた資料を、小人数のグループをつくり話し合ってもらい、その結果、グループとして大切と考えることを5つずつ発表して貰った。

- 1位・・・優しい笑顔で子どもと接すること。
- 2位・・・保育者の資質 3H（Heart・Hand・Head）を兼ね備える。
- 3位・・・愛着関係を築く。
- 4位・・・子どもの気持ちに寄り添う。
- 5位・・・子どもに適した環境づくり

1位	2位	3位	4位	5位
18	15	14	9	8

以上、上位の結果であるが、学生達の大半が意識している事柄が伺えた。また、少数意見ではあるが、以下の通りであった。

- ・個人差に配慮する。
 - ・子どもの表情の変化に気づく。
 - ・命を預かっているという意識を忘れない。
 - ・子どもにとっての良い手本となる。
 - ・安心感を与える。コミュニケーションを大切に
 - にする。
 - ・清潔・安心・安全な環境をつくる。
 - ・見守る・待つ。
 - ・自らやりたいと思う気持ちを引き出す。
- という意識が伺えた。

結果

学生達の気持ちが推測でき、まだ曖昧ながらも、授業の中で伝わってきている。

反省・評価

授業の中でエピソードについて質問すると、子どもの気持ちに寄り添わず、保育者主導の考え方をする学生もまだ見受けられた。その場では、あえて否定はせず、授業を進める中でいずれ気づいていくことが大切であると考え、実践しているところである。

考察

乳児保育の在り方が混迷して激動している。少子化対策や規制緩和、待機児童0作戦などから保育所の『質』と『量』をどう確保していくか。とくに乳児保育に対する需要がふくれあがり、待機児童が多い事は冒頭で述べた通りである。そういう社会状況にあって、こ

れからの保育所重要課題のひとつが『質の高い乳児保育の創造にある』と思ってやまない。質の高い乳児保育とは、まず一つ目は、「乳児期の特徴は発達が他の時期に比べ著しいことであるから、その著しい育ち、発達の経験を確実なものにしていくこと」。3歳未満児においては、生涯にわたる大人と子どもの愛情の絆である愛着関係を築き、自我のめばえ、自立のめばえを育みたい。二つ目が子育て支援である。3歳未満児は、思っていること、考えていることを言葉で伝えられないだけにまずは、保護者と保育者の信頼関係が築かれ、車の車輪のように、一緒に子どもを育てあう。双方の信頼関係があればこそ子どもの情緒の安定が保証される。「保護者と一緒に子育ての大変さを分かち合いながら、子どもが、道筋をたどって成長していく姿を学びあい、保護者が子育ての喜びをつかめるよう支援すること」である。

本学生は、子どもが好きで短大に入学していることが分かり、良質な資質をもった学生達であるのが伺えた。しかし、まだ大人主体で考えてしまいがちである。おそらく自分の経験から幼児期から青年期に受けてきた授業との関わりの中において大人主体で行われてきたことの体験から、短絡的に大人主体の考え方が残っていることが感じられた。

参考文献

今求められる質の高い乳児保育の実践と子育て支援 榊原洋一・今井和子編著 ミネルヴァ書房